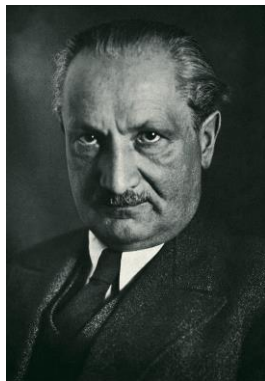


『Mind Charging』

第 209 回 発行：入試広報室 発行日：令和 3 年 2 月 9 日

マルティン・ハイデッガーの名言



人は、いつか必ず死が訪れるということを思い知らなければ、
生きているということを実感することもできない。

恐怖を感じるような印象を受ける言葉ですが、『終わる』ということを知らないうちはいつまで経っても“後回し”にしてその場のぎの思考になってしまうということをメッセージとして伝えたいのだと思います。この言葉通り、人は残念ながら必ず死んでしまいます。この世に生を受けた瞬間から、いずれ訪れるその瞬間に向かって生きていくわけです。そのことは誰もが理解していることではありますが、健康に日々を過ごしているうちは『当たり前』という感覚になってしまいます。

学校でも同じことが言えると思います。例えばテスト前になると焦って準備(テスト勉強)をしたり、部活で先輩が引退する直前に“自分(の学年)がリーダーになって部をまとめられるだろうか・・・”と不安に襲われたりします。例に挙げたこの 2 つについては決して良いこととは言えませんが、間違いなく言えることは、“必死になった”ということです。必死になるということは、ある意味では活気が漲っている状態でもあると思います。ストレスがかかりすぎるのは問題だと思いますが、多少の制限などがあつた方が集中力は発揮しやすい傾向にあるようです。そういう意味では課題意識を高めて様々なことに率先して挑戦することによって、自分の集中力を鍛えるだけでなく、ポジティブな活気に溢れる人に近づくということです。そんな人が多いことが正智深谷高校の『強み』だと言えるような学校にしていきたいと思います！(編集委員：入試広報室 鈴木)

マルティン・ハイデッガー(Martin Heidegger, 1889 年 9 月 26 日 - 1976 年 5 月 26 日)は、ドイツの哲学者。ハイデガーとも表記される。フライブルク大学入学当初はキリスト教神学を研究し、フランツ・ブレンターノや現象学のフッサールの他、ライプニッツ、カント、そしてヘーゲルなどのドイツ観念論やキェルケゴールやニーチェらの実存主義に強い影響を受け、アリストテレスやヘラクレイトスなどの古代ギリシア哲学の解釈などを通じて独自の存在論哲学を展開した。1927 年の主著『存在と時間』で存在論的解釈学により伝統的な形而上学の解体を試み、「存在の問い(die Seinsfrage)」を新しく打ち立てる事にその努力が向けられた。ヘルダーリンやトラークルの詩についての研究でも知られる。20 世紀大陸哲学の潮流における最も重要な哲学者の一人とされる。その多岐に渡る成果は、ヨーロッパだけでなく、日本やラテンアメリカなど広範囲にわたって影響力を及ぼした。1930 年代にナチスへ加担したこともたびたび論争を起こしている。(Wikipedia 参照)